

第3回

美学

・

藝術論研究会

研究発表会

日時 2017年12月9日（土）
13時30分－15時10分

会場 東京藝術大学 上野キャンパス
美術学部 中央棟1階 第2講義室

※参加費は無料です。

※どなたでもご自由にご参加ください。

研究発表① 13:30－14:15

大澤 慶久（東京藝術大学）

日本の美術批評の深奥

——コンセプチュアル・アートはなぜ是認されなかったのか

研究発表② 14:25－15:10

喜屋武 盛也（沖縄県立芸術大学）

感情移入と擬人観

お問い合わせ

東京藝術大学美学研究室内

美学・藝術論研究会事務局

geidai.bigaku@gmail.com

第3回 美学・藝術論研究会 研究発表会

日時：2017年12月9日（土）13時30分－15時10分
会場：東京藝術大学 上野キャンパス 美術学部 中央棟1階 第2講義室

日本の美術批評の深奥
——コンセプチュアル・アートはなぜは認められなかったのか

大澤慶久（東京藝術大学）

戦後日本の美術界において、とりわけ50年代、60年代、欧米の最新の美術動向が矢継ぎ早に輸入された。アンフォルメル、ネオ・ダダ、ハプニング、環境芸術、アース・ワークといった海外の諸動向は当時の日本の美術雑誌の紙面を彩った。とはいえ、あらゆる動向が重要なそれとして受容されたわけではなく、むしろその多くは一時的に消費され、忘れ去られてしまったと言えるかもしれない。

これら様々な諸動向の中で、いささか特異な位置を占めているものがある。61年のヘンリー・フリントを端緒とし、とりわけ60年代後半から70年代前半にかけてソル・ルウィットやジョセフ・コース、アート＆ランゲージらを中心に隆盛したコンセプチュアル・アートである。日本の美術界においてそれは度外視されることもすくさま忘却されることもなく、批判的検討や擁護が60年代末頃から70年代を通じて行われ、また80年代、90年代においてもわずかながらその後の展開の足跡が追われることとなった。けれども、それは日本の美術界においては積極的に推進すべき重要なムーヴメントとして、あるいは欧米に比して確固たるひとつの自律した様式として認められることは遂になかったと言えるだろう。一体、コンセプチュアル・アートはいかに受容されたのだろうか。

日本の美術界におけるコンセプチュアル・アートの受容に関する先行研究に、鈴木勝雄の「日本における『コンセプチュアル・アート』元年——1969年の言説空間から」がある。この重要な研究は、「コンセプチュアル・アート」という語が日本の美術の言説空間に初めて登場したとき、いかにして捉えられたのかを69年の言説を分析することによって検証するものである。この論考は、コンセプチュアル・アートが、手の失権や芸術の廃棄の問題、李禹煥のオブジェ思想批判といった60年代末にひしめいた諸言説の多層性において受容されたということを明らかにしている。

では、70年以降それはいかに理解されたのか。この発表では、日本の現代美術の言説編成に寄与し続けてきた美術批評家たち——中原佑介、藤枝晃雄、千葉成夫、峯村敏明、宮川淳など——によるコンセプチュアル・アートについての70年代初頭から半ばに展開された批判及び擁護の大意を明らかにする。ここで取り上げるテキストを幾つかピックアップすれば、藤枝「知的表現の奪還へ」（71年）、中原「眼にみえない芸術」（71年）、峯村「たそがれ（誰彼）の概念芸術」（74年）、宮川・高松・中原の座談会「事物と言語」（74年）などである。これらのテキストを検討することにより浮かび上がってくるのは、芸術とは、概念と物質の連関とその間隙にこそその本分があるということ、逆にいえば、概念／物質のいずれか一方では成立しえないという、批判・擁護の両者に通底する芸術観である。本発表はこの正鵠を射た美学的な背景を、「概念の芸術」が認め・推進されることのなかった一因としてとらえてみたい。

感情移入と擬人観

喜屋武盛也（沖縄県立芸術大学）

ヴェルフリンは『ルネサンスとバロック』（1888）において独特の建築観を披歴している。すなわち、人は自らの運動、身体感覚をベースとして、眼前の建築をもまたひとつの身体（Körper）としてとらえることができる、というものである。こうした、いわば身体論的な建築観に対して、二つの側面からのアプローチが考えられる。一つは「感情移入」（Einfühlung）であり、もう一つは「擬人観」（Anthropomorphismus）である。本発表はこの二つのキーワードを手掛かりとして、芸術活動および広義の認識体験の根底に潜んでいる構造について若干の考察を試みるものである。

感情移入の学説はリップス、フォルケルトらによって19世紀後半に盛んに議論され、ヴェルフリンにも大きな影響を与えたものである。脳科学の発達により神経美学が論じられる昨今、感情移入の学説もあらたな枠組みの中で再検討されるべき対象となろう。ミラーニューロンやピークシフト説などをもとにすれば、ヴェルフリンの建築観を補強および拡張することができるのではないであろうか。

また、建築を身体としてとらえるヴェルフリンの視点は、芸術のもつ根源的な擬人観的性格をも指摘している。ヘーゲルの『美学』では、古典的芸術形式への、さらにはロマン的芸術形式への展開が描写、論述されているが、彼はこうした芸術の発展を擬人観の強化という点からも語っている。そこには、「神人同形説」としてとらえられるような擬人観の宗教思想的な側面があるばかりでなく、「人間的なもの」が芸術の獲得する内容として深められてゆく過程が示されていると解釈できる。さて、造形芸術においては、作品に人の姿かたちを表現しその理想形を示すという擬人観的伝統を指摘することができるであろう。さらに、演劇や舞踊、音楽などのいわゆる上演芸術についても、生身の人間が舞台に立ち演じることを大前提としている以上は、そこに基底としての擬人観が存在していると判断される。こうした擬人観は、高度に発達したテクノロジーがこれらの領域における人間中心的な前提を解体する可能性を提示している今日においてさえ、なお根強く存在しているように見受けられる。根源現象としての人間の形姿をそこに指摘することができるのである。